

## 山上研「研究室年報」創刊によせて

山上 精次

専修大学心理学科は、平成 22 年度 (2010 年) 4 月、新設なった人間科学部に移籍しました。かねてから、これを機に山上研究室でも何らかの形の研究室ジャーナルを刊行しようという企画を温めていました。この度、いろいろな環境がととのって、こうして形あるものとして刊行できる運びになったのはまことに存外の慶事です。

年報の企画意図を述べる前に、まずは専修大学の心理学教室の歴史、来歴をエピソードを交えて簡単に紹介することにします。

### 心理学教室の歴史

そもそも生田キャンパスに心理学の専門課程を講ずる組織として心理学教室が創設されたのは昭和 42 年 (1967 年) でした。創設者の故重松毅先生 (1919 年～2006 年) が愛知学芸大学から設置準備のために赴任され、重松先生のお声がかかりで、東京大学関係者から、金城辰夫先生、中谷和夫先生と河内十郎先生の 3 名が招聘され、合計 4 名のスタッフでスタートしました。

#### 組織

心理学教室は、公式の組織体としては文学部人文学科心理学コースとして出発しました。初期の段階では、文学部は国文学科、英米文学科、人文学科の 3 学科で人文学科には、哲学コース、歴史学コース、地理学コース、社会学コース、心理学コースの 5 コース制をとっていました。人文学科に入学した学生は、1 年次の秋に 2 年生からどのコースに進学するかを決めることになっていました。あとで述べますが、特に各コース別の定員が定められていたわけではないので、実験系の心理学などは学生数が大きく変動するのが教育のおおきな足かせになっていました。

#### ひと

ボクが講師として生田に赴任したのは昭和 53 年 (1978 年) でした。当時の心理学教室は創立者の重松先生それから金城先生、高橋先生そして故東條正城先生 (1941 年～2000 年) の 4 名の先生方から構成されていました。僕は第 5 番目のもっとも若輩の専任教員として受け入れていただきました。5 名の専任教員に加えて実習助手の伊藤博子さんの合計 6 名、というのがスタッフ

の全てというこじんまりとした、またとてもアットホームな雰囲気の研究室でした。

当時は心理学の専門科目のカリキュラムを考えたり、非常勤の先生を選任したりするのに、特に会議が開催されるわけでもなく、何となく重松先生を中心にお茶をのみなが談話をする、そんな中で教室の大きな方針が決まってきました。「何となく」交わされる会話の流れから、決まったと思われることがらを抽出し、具体化のための段取りを準備するのは実習助手の伊藤さんのお役目でした。「心理学研究室」(図 1) の中央位置に設置されていた会議テーブルの隅で、にこにこされながら会話の流れをつかみ、何が決まったかを「あうん」の呼吸でつかむという、伊藤さんの超人的な把握力のおかげで、大きな問題も発生することなく、教室が運営されていました。

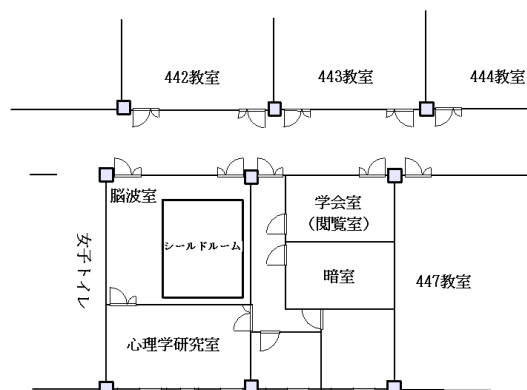


図 1 設立当時の心理学研究室と実験室。これがすべての心理学「領域」でした。現在の 4 号館 4 階、脳波実験準備室の一角が創立以来、平成 21 年 8 月までの長きにわたり「心理学研究室」でした。

心理学教室で物事を決定する際には、大小にかかわらずどんなことも重松先生のご承認が必要でした。極端な話、ロッカーの位置を変更するだけでも、お伺いを立てなければなりません。金城先生はじめ諸先輩の先生方は、重松先生の前ではいわば直立不動の感じでしたように思います。それに対して、一番若輩者の僕は、もちろん大先輩だし教室の責任者でもいらっしゃる

ので、先生のことを心底から尊敬申し上げていましたが、うまく言葉では言い表せない親近の気持ちを抱いていました。もしかしたら、諸先輩方は、僕の傍若無人さ、あるいは若さにまかせての言いたい放題、お願い事のし放題に苦々しい思いをされていたのではないかと今思い返すと冷や汗ものです。実際、重松先生は大概のお願い事は、「わかった、そうしなさい」というふうにお認めいただいていたのですが、ときには、あるいは割に頻繁に「だめだ、だめ、だめ、全然だめ。」と断固として即座に却下されました。ああ、やっぱりだめだったかと、しょげていますと、翌日になるとはにかんだ感じで「昨日の件だが、まあ一度好きなようにやってみたらよい」というふうに仰ったりします。先生の懐の深さというか、おおらかさというか、そんな面に僕は心底からの敬愛の気持ちを抱いていました。

#### 施設

僕が生田に赴任した昭和 53 年には、創立時の心理学実験室そのままが心理学教室のすべての実験室でした。図 1 のブロックが心理学教室のすべての実験室、研究室でした。

当時の研究室には、外部と連絡可能な電話回線がありませんでした。5 階の「4 号館研究室受付」には外線からかかる電話回線がありましたが、その「受付」と 4 階の心理学研究室を連絡する「インターフォン」があっただけです。もちろん、外部回線とインターフォンとははつながっていませんでしたので、外部から心理学研究室に電話がかかると、受付の方から「伊藤さん、お電話です」とのインタフォン連絡があります。それを受けると、伊藤さんは文字通り階段を駆け上がり、電話に対応される、そんなふうでした。

もちろん何度も電話回線導入の願い書を大学に提出しましたが、当時、大学の方針として電話は教務課などの事務室と研究室受付以外は設置しないという硬い壁があったために、願いは届かず、長年にわたって門前払いされ続けていました。そんな時、偶然、当時の「電算室<sup>\*1</sup>」から、不要になった TTY ターミナルがあるが心理で使わないか？ というお申し出がありました。そのターミナルに公衆電話回線、モデム (300bpm) を接続すると、当時の東大のコンピュータセンターに接続して、SAS などの統計計算ができるというので、そのために直通電話回線をいれて欲しいという願い書を提出したら、当時の教務課の課長補佐の方や電算室の関係者の強力なサポートもあって、すんなりと認められました。計算の

ために使用していない時間帯には通話もして良かったので、ようやく伊藤さんが電話の度に 5 階まで駆け上がるというご苦労が解消されました。

僕が入植当時の心理学研究室には、今考えるとまことに何から何まで「無い無い尽くし」でしたが、コピー機もありませんでした。そのために論文や資料を複写するのに大変な不便をしていました。学生実験でデータを配布するのもしいち教務課の作業室を使わせてもらっていました。もちろん当時のコピー機は高価で、今のようどこにでもある、という機械ではありませんでしたが、他大学の研究室の多くには既に設置されていたように思います。ボクも前職の研究室では、なんの制約もなく複写機を使っていたので、とても困った記憶があります。

あまりにも不便をかこっていた僕を見かねて、先輩の東條先生が「二人でお金を出し合って中古機を買おう」と提案してくださいました。二人で自腹を切って購入し、ようやく実験授業でのデータを配布したりする、ある意味で当たり前のことができるようになりました。しかしその中古マシンは、メンテナンス契約をしていなかったために、1 年もしないうちに、複写が黒ずんでよく見えなくなってきた、結局、東條先生のご実家の方でお使いになりたいということで、さらに下取り購入していただきました。その後、しばらくして研究室でも複写機をレンタルすることができるようになって、この問題はようやく解決しました。

かつて 4 号館四階の心理学実験室には、どの部屋にも冷房がありませんでした。暖房はいわゆるスチーム暖房があって、冬はとても暖かかったのですが、夏はそれはそれは辛いものでした。先輩の東條先生や僕などは夏休みでもほとんど毎日大学にでてきていましたが、扇風機が涼を取る唯一の文明的機械でした。あまりに暑いので、東條先生は夏休み中、ずーっとサンダル履き、短パンで実験室にいらしてました。実習助手の伊藤さんは夏休みの出勤時には、まずは教務課にある製氷機に行き、クーラボックスに氷をつめて研究室にもって来るのが朝一日課でした。日中、暑い時間帯には、それをがりがりとかちって暑さをしのいでいらっしやいました。教務課などの事務室にエアコンが設置されたあと、何年も、研究室や実験室のエアコン工事の順番はめぐってきませんでした。どうせ先生たちは大学にこないのだから、というのが、当時の事務の皆さんの言葉でした。

心理学実験室にエアコンが導入されたのは、いわば変なきっかけによります。その年、先の図の西隣の 1 教室 (447 教室でした) をパーティションで 4 つに区分けし、その一角に日立製作所の「ミニコン E-600」が導入されました。ミニコンとは言いますが、かなり本格的で高性

<sup>\*1</sup> 今日の情報科学センターの前身。伊藤朋也さんという熱血漢にして大変な勉強家が礎を作られました。その伊藤さんからのお声がかかりであったと記憶しています。

能、高価なコンピュータでしたので、その機械を冷やすために、エアコンが設置されたのがきっかけでした。これ以降、夏休みに大学に出て来ても、ミニコン室の冷気で一息つけるようになりました。この部屋の一角が現在の「サーバー室」です。

現在の整備完備された研究室環境は、実は諸先輩の先生方のご苦労の末に徐々に整ったものです。また大学とはいかなるものであるべきかについて明確な見識をもった各事務部署部局の方々のご理解とご協力の賜物だと思います。

しかし、教育と研究のために必要な環境は、日進月歩の科学技術の進歩にともなって、年々高度化しています。現状への感謝を忘れることなく、さらに一層整備され使いやすい実験室、研究室にすべく着実に明確な方向性をもった努力が求められていると思っています。

#### 学生

僕が赴任してきた当初の人文学科心理学コース時代には、学生はコース所属せずに1年生を過ごしたあと、2年になる時にコース分かれの選択する仕掛けになっていました。その際、特に選抜があるわけではなく、学生の希望通りのコースに進学できるという制度になっていました。そのため、年度によって学生数が大きく変動し、多いときには90名近く、少ないときには50名台という風でした。

当時のカリキュラム委員は、1年生対象の進学ガイダンスでいかに適切な学生数に絞り込むかが問われていました。優しい顔をしてどんどん心理に來なさいというガイダンスをすると90名超になるし、厳しい顔をして、心理などにくるな!という風なガイダンスをすると学生数が少なすぎて重松先生に叱られる、その繰り返しでした。

なんとか1年次から学生数がある程度確定できる学科として心理学教育を実践したい、というのがその頃からの悲願でした。この思いが、平成8年(1996年)の心理学学科創設につながることになります。

この先の心理学研究室「近現代史」は、次号にまわし

ます。

## 研究室年報について

心理学研究室の来歴についての語りが思いのほか長くなりすぎました。本題に戻しましょう。

従来から僕の研究室では研究室に配属になった学生の文書作成は $\text{\TeX}$ 以外は認めないという一貫した方針を保っています。今や「伝統」と言ってもよいでしょう。個々の卒論が $\text{\TeX}$ で書かれていれば、このジャーナルのように、簡単に、しかもきれいに製版して年報を作成することができます。サイエンスの世界では $\text{\TeX}$ がデファクトスタンダードであるにもかかわらず、なぜか心理学の世界では $\text{\TeX}$ が普及していません。理由は、おそらく心理学が古くから(明治初年から!)人文系の学部・大学院に属し続けたため、僕ら、教育する側＝教師が教育を受けていないからだと思います。

以前、山上研では、印刷物の論文集ではなくて、インターネット上に卒論アーカイブを公開していたことがあります。諸般の事情、おもに個人情報保護法パニックによって暫時中止していました。人間科学部心理学科として再出発した今年、印刷物としてジャーナル＝年報も再出発させようと思った次第です。また同時に、この印刷物をオープンジャーナルで公開しようという企画もっています。実はそのためのサーバーは既に、ソフトも含めてセットアップ済みで、もう数ヶ月に渡り試験運転しています。

まもなくこの年報をサーバーにアップロードし、後輩たちが資料として活用できるようにします。なお後輩達の日々の研究活動も、オープンジャーナル上に公開させる予定です。基礎実験Ⅱで高まった論文書きのスキルが、ややもすれば3年生の1年間と4年生の前半で衰滅して行くのを防止し、3年生以降、さらに磨きをかけようというのが僕の目論見です。

(Received 2011年2月2日)